

### ドビュッシー そのインスピレーション



今年フランスの作曲家ドビュッシーの生誕 150 年。各地で記念イベントが開かれています。文学や美術・演劇など同時代の様々な芸術から影響を受けている彼の作品を、少したどってみましょう。

### クロード＝アシル・ドビュッシー (1862～1918)

19 世紀末から 20 世紀初頭のヨーロッパにおける、もっとも重要な作曲家の一人。既成の音楽観や形式観にとらわれず、五音音階や全音音階、自由な和声法を用いて作曲した。

#### ～文学から～

《選ばれた乙女 *La damoiselle élue*》1887～88 年作曲

画家で詩人の D.G.ロセッティの詩『祝福されし乙女』に作曲されたカンタータ。ソプラノ・アルトの独唱と女声合唱、管弦楽による編成。エルネスト・ショーソンらに高く評価された、初期の傑作。

《牧神の午後への前奏曲 *Prélude à l'après-midi d'un faune*》1892～94 年作曲

S.マラルメの詩『牧神の午後』に寄せて作曲された作品。冒頭のフルートソロの美しさが有名な管弦楽曲。1912 年には V.ニジンスキーがこの曲に振付をしたバレエが初演されている。

#### ～美術から～

《喜びの島 *L'isle joyeuse*》1904 年作曲

J.A.ワトーの名画「シテール島への船出」から着想されたといわれているピアノ曲。ちなみに、フランシス・プーランクも同じ絵にインスピレーションを受けて 2 台のピアノのための曲を書いている。

《金色の魚 *Poissons d'or*》1907 年作曲

中国か日本の漆塗りの盆に描かれた魚の絵を見て、その魚の動きを表現したピアノ曲。『映像』第 2 集の 3 曲目に収められている。このほか同じ曲集の《そして月は廃寺に沈む》や、『版画』の第 1 曲目《塔》にも、中国や日本の美術作品からの影響があるといわれている。ドビュッシーはそうした美術品の収集をしており、部屋の中には浮世絵などが飾られていたそう。

#### ～演劇から～

《ペレアスとメリザンド *Pelléas et Mélisande*》1893～1902 年作曲

ドビュッシーが作曲した唯一のオペラ。M.メーテルランクによる戯曲の上演を観たのが 1893 年、すぐに作曲の許可を得て 95 年には第 1 稿が書き上げられたが、なかなか上演の機会に恵まれなかった。1902 年にアンドレ・メサジェの指揮により初演される。

#### ♪上記作品が収められた CD・映像資料をご紹介します♪

2N2.30 「放蕩むすこ・選ばれた乙女」ベルティーニ(指揮)シュトゥットガルト放送交響楽団

3C4.53 「牧神の午後への前奏曲 他」パユ(FI)アバド(指揮)ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団

3J6.11 「版画・映像・喜びの島 他」ペロフ(Pf)

DVD752-753 「ペレアスとメリザンド」ウェルザー＝メスト(指揮)チューリヒ歌劇場

最近受け入れた新刊・新譜から、おすすめの資料をご紹介します♪



## 【音源資料】

『ベートーヴェン：ピアノ・ソナタ全集 ファンタジア』 菊地裕介(Pf)

請求記号：6J3.40-41

若手ピアニストによるベートーヴェンのピアノ・ソナタ全集の第3弾。すでに中期と初期のソナタがリリースされており、今回はその中間にあたる8曲が収録されている。シンプルで奇を衒うことのない、まっすぐな音楽が心地よい。特に、第12番の第1楽章。ゆっくりとテーマが変奏され、その色合いが移ろっていくなかでも、常に深いところから音楽を支える支柱のようなものがあるのを感じる。前述の中期のソナタ（請求記号：6J1.44-45）、初期のソナタ（請求記号：6J2.05-06）も併せてどうぞ。

『コロラトゥーラ・オペラ・アリア集』 ダムラウ(Sop)、エッティンガー(指揮)、ミュンヘン放送管弦楽団

請求記号：3L9.51

メトロポリタン・オペラなど世界の一流オペラハウスで活躍中のドイツ人ソプラノ、ディアナ・ダムラウ。リーアのCDも数枚出しているが、今回紹介するのはイタリア語・ドイツ語・フランス語・英語によるオペラ・アリアを収録したアルバム。声は常に伸びやかで色彩豊か。そして緩急のつけられた音の運びは、声と音の運動性が一体化したジェットコースターのように。まさに自由自在な声である。難曲で有名なバーンスタイン作曲の『キャンディード』のアリアでも、人間的な感情の移り変わりをさまざまな声で表現している。

## 【映像資料】

『プロフェッショナル 仕事の流儀 かけっぴちの向こうに喝采がある 指揮者大野和士の仕事』

請求記号：DVD1719

ヨーロッパで主に活躍している指揮者大野和士のインタビュー番組がDVD化されたもの。大変多忙な毎日を送っている大野の日々が、ドキュメンタリーとしてまとめられている。実際放送されたのは5年ほど前だが、現在の大野の活躍ぶりを見ると、今もこの時とほとんど変わらぬ日々を過ごしているのではないかと想像できる。美しい音楽が作られる裏側を垣間見られる一方で、指揮者として、東洋人として、ヨーロッパの音楽社会で生きていくことの過酷さも感じさせる内容。常に前進し続ける大野の姿が、眩しく感じられる。

## 【図書】

『フルトヴェングラー』 吉田秀和 河出文庫 請求記号：B0.9-Y83-11

昨年末に出版された文庫本。吉田秀和が1957年から2008年までに書いたフルトヴェングラーに関する文章がセレクトされ、一冊にまとめられている。言うまでもなくその筆致は実に鮮やかで、読む人の心をつかむ。フルトヴェングラーといえば既に伝説化された人物であるが、吉田の文章は、彼が我々と同じように生身の人間であったということや、どんな音楽家であったかを改めて知らせ、感じさせる。しかしながら、もう吉田の新しい文章が読めないというのは、非常に悲しいことだ。